

教員紹介



Takahashi Masaru
高橋 哲

臨床と科学の視点から、
非行や犯罪にまつわる
心理を考える

2020年4月に着任された基幹研究院人間科学系准教授の高橋哲先生にお話を伺いました。高橋先生は、犯罪心理学や臨床心理学が専門であり、学部では生活科学部心理学科に、大学院では人間発達科学専攻発達臨床心理学コースと発達臨床心理学領域に所属されています。

R1 ご経歴について教えてください。

私は東京大学教育学部を卒業した後、法務省に入省し、約20年にわたり心理技官として勤務してきました。法務省在勤中には、南イリノイ大学カーボンデル校に留学して修士号を取得し、帰国後は社会人学生として筑波大学大学院人間総合科学研究科で博士号を取得しました。2020年3月に法務省を退職し、同年4月にお茶の水女子大学に着任しました。

R2 心理技官とはどのようなお仕事ですか。

心理技官は、矯正施設において非行や犯罪の原因を分析する心理職です。特に、私が勤務していた少年鑑別所における心理アセスメントは、面接や心理検査等を通じて、非行少年の行動の背景にあるさまざまな要因を明らかにし、立ち直りに向けた方策を考えるものです。日々の業務の中で彼ら彼女らの態度や境遇に感情が揺さぶられることもあります。「なぜ非行をしたのだろう」と面接や心理検査や行動観察を通して客観的に仮説を検討し、その子らしい像が浮かび上がってくると、「ああそういうことか」と腑に落ちて、立ち直りに向けた方策を具体的に提案できます。非行や犯罪という、眉をしかめたり、「向こう側」と「こちら側」の二つに分けて捉えたりする方もいるかもしれませんが、そう簡単ではないなあと感じさせられることが多かったです。

R3 これまでにどのような研究をなさってきましたか。

専門は犯罪心理学や臨床心理学という

分野です。臨床現場で不思議に感じたことや、非行少年を理解するために必要だと思うことを実務の傍らで研究してきました。大学教員には本来一貫した研究テーマがあるべきなのかもしれませんが、私は、犯罪者や非行少年の再犯防止や改善生に役立つものであれば何でも研究したいと考えています。

その中でも、特に研究してきたことのひとつが、再犯リスクアセスメントです。非行少年が再犯するかどうかを追跡研究で確認し、再犯する者と再犯しない者とに分けたうえで、生存時間分析などの統計学的手法を用いて実際に再犯と関連する要因を一つずつ明らかにしていきます。単に「ある人が再犯しそうかどうか」を予測してその当否に一喜一憂するのではなく、個々人の再犯リスクを見極めて、そのリスクが高い人に重点的に支援を行うといったように、あくまで改善生に生かすための手法を開発するために実務の中でやってきた研究です。

もう一つは、嗜癖的な行動、特に自傷行為について研究してきました。他者の権益を侵害する者というイメージのある非行少年や犯罪者は、実は自傷行為に及ぶ比率も高いのです。自傷行為は、自己の感情を調整することや自己を罰するために行われることが多く、特に女性においてその傾向が顕著であることもわかってきています。自傷と他害はコインの裏表と言われることもあります。双方がどのように関連するかについてさらに研究したいと考えています。

R4 これから取り組まれない研究・教育について教えてください。

社会において犯罪やその対策が話題に上る際に、先入観や信念をもとに議論がなされ、科学的根拠が疎かにされていると感じることがあります。臨床心理学の中でも

司法・犯罪領域は特に科学的根拠を重視しますが、それらを一般市民にどのように伝えて理解してもらおうかについては、まだ研究の余地があると感じており、認知・社会系の心理学者との共同研究にも興味があります。その一方で、面接や心理検査における職人芸も臨床現場では重要であり、職人芸と科学の双方の観点から研究していきたいと考えています。

研究以外にも、本学の心理臨床相談センターの運営と相談員である大学院生の育成も私の責務であり、心理職としての研鑽を積みながら、教育に取り組みたいと考えています。

R5 お茶大生に対してどのような印象をお持ちですか。

もの静かでありながら芯が強い、というイメージです。法務省にも多くのお茶大OGがいらっしゃいましたが、優秀であるだけでなく、組織の中で自分の意見を通すための強さや柔軟性も兼ね備えており、見習う点が多いなあと感じていました。

R6 お茶大生に向けたメッセージをお願いします。

希望する進路や研究テーマが明確な方もいれば、まだ迷っている方もいると思います。最初は興味がなかったことでも続けているうちに面白い点が見えてきたり、ひょんなことから道が開けてきたりするように、偶然に思えることが人の進路を変えていくことも多いように感じます。食わず嫌いせずいろいろな場に顔を出してみることが大切なのかもしれません。

文責：人間発達教育科学研究所 助教 今泉 修

卒業生紹介



Karatsu Eri
唐津 絵理

所属：愛知県芸術劇場
(公益財団法人愛知県文化振興事業団)
出身：熊本県

1990年3月 お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒業
1992年3月 お茶の水女子大学人文科学研究科修士課程修了
1992年4月 愛知芸術文化センター(文化情報センター)に就職
1993年4月 同 全国初の公務員ダンス学芸員となる
2010年 「あいちトリエンナーレ」
~2016年 パフォーミング・アーツ部門キュレーター
2014年4月 愛知県芸術劇場シニアプロデューサー(現在に至る)
2020年3月 Dance Base Yokohama
アーティストティックディレクター(現在に至る)

ダンス作品の観方をどう伝えるか？

愛知県芸術劇場は舞台芸術を鑑賞する場を提供する事業に加えて、普及教育、地域課題解決型の事業を展開しています。唐津さんはこれらの事業を複数展開されていますが、とりわけ筆者が感銘を受けたのは、潜在的観客層への普及教育事業でした。というのも唐津さんが力を注ぐコンテンポラリーダンスは、市民参加型のワークショップとしては国内の公共ホールでも注目されていますが、その公演への観客動員は難しいとされています。そこで唐津さんに、一般の人々にダンス作品の観方をどう伝えるのかと伺いました。すると「誰もが体一つだけ持っていますよね。ダンスを観るといのは、その体が生み出すクリエイティビティや可能性を感じる」と。また「人間の歴史の中でダンスは常に人の生死に関わり、鼓舞してきた。難しいことを考えなくてもダンサーの動く身体を生で、観ればミラーニューロンの動きで元気になる」ということを教えて頂きました。これはダンサーの動きを観て感じるだけでも、自分がダンスをするのと同じ効果をもてることを意味しており、芸術作品を当事者として体験する素晴らしさを伝える言葉であるように思います。



©Naoshi HATORI 提供：Dance Base Yokohama
「ダンスのアクセシビリティを考えるラボ～視覚障害者と味わうダンス観賞篇」研究会の様子

事業計画はデザイン型思考で！

現在唐津さんは、愛知県芸術劇場にて国内外のバレエ団やダンスカンパニーの公演を企画するだけでなく、自ら振付家やアーティストらをつなぎ多様な組織や劇場と連携して新たなダンスの公演のプロデュースも手掛けています。前例のない事業を実現し、さらに成功させる鍵は何かを伺いました。「当初はダンスについて知る人はほとんどいなかったの、上司にダンスの事業の必要性和その効果などを説明し納得して」いただき、地域の観客を集めるために「ダンスの価値を伝え、これまでと違うどんな新しい体験ができるか等のイメージを提供する」そしてこれらのための「リサーチを常に欠かさない」とのことでした。ニーズを探し解決策を考えヴィジョンを提供するという、まさにデザイン型の思考です。

努力をすること、そして同じような志をもつ人たちとの連携が大切」と伝えたいと語られました。



©Naoshi HATORI 提供：Dance Base Yokohama
OpenLab「ダンサー、言葉で踊る」トークイベントの様子(写真左から小尻健太、島地保武、唐津)

DaBY(デイビー)始動へ

そもそもダンス芸術は自活が難しく、慢性的な収入不足にある領域だと言われます。唐津さんはこうした領域にこそ支援が必要と声をあげ、2020年春、セガサミー文化芸術財団の支援を受け、パフォーミング・アーツの拠点Dance Base Yokohama(愛称DaBYデイビー)の開設を実現されました。DaBYは横浜みなとみらい線馬車道駅直結のビル3Fのフロアを占めるスペースで、スタジオ、資料閲覧アーカイブコーナー、そして照明機材などの什器のあるアクティヴエリアがあります。自主企画事業、活動拠点支援事業、活動支援事業と幅広く、コロナ禍でせつかくのオープニングイベントが延期や変更を迫られながらも、ライブ配信や動画配信も組み込みながら精力的に活動が展開されています。

唐津さんは、DaBYをダンスアーティストのプロフェッショナルな活動を育み支援する場として、またダンスに限らず領域を超えたアーティストや関係者の交流の場となることを目指していると言います。「DaBYに熱心に通う学生も出てきています。「ダンス芸術をとりまくわが国の環境を、今いる人材や、機関の連携によって改善していきたい」と語られる姿に、取材を通して感銘を受けました。

取材・文責：基幹研究院人文科学系助教 福本まあや

わたしのオフタイム

お休みの日は、昨年14歳で亡くなったボルゾイ犬を思い浮かべながら、4歳になる黒猫と過ごしています。そんな時には必ず美味しいスイーツも用意します。時間があれば、ひたすら寝たりマッサージをしたりして、リラックスタイムのようにしています。